

軍事史学

第46巻 第3号

巻頭言

戊辰東北戦争への一視角

維新政権成立当初、新政府の指導者と東北諸藩の指導層の情勢認識の「差」について、木戸孝允と、『鷹山公偉蹟録』の著者として知られる米沢藩士甘糟成の二人をとりあげてみる。

米沢藩記録所頭取甘糟継成は、慶応四年正月二十九日の夜、「排閤日録」の序文を起草、そこで旧幕府大敗後の見通しを「永禄天正」の如き群雄割拠に突き進むと予測した。一方、新政府の木戸孝允は翌二月、「版籍奉還」に関する建言書案を起草し、いま天下の大勢は「元龜天正」の群雄争覇の時ではないと断言する。この両者の鳥羽伏見戦後の見通しは、藩の構造や幕末以来の中央政局への関わり方、本人の置かれた立場などによるとはいえ、その違いは大きい。

甘糟はすでに動乱必至の情勢とみて、西南雄藩連合の新政権に対抗するため、正月十七日藩老らに「奥羽合従連合」の構想を建言し、「奥羽同盟」を提唱した。その後、一文官の彼が軍制改革を提議、千坂高雅総督の軍務参謀に就任して、熾烈な北越戦争の戦局を指導した。彼は海に恵まれない米沢藩の「窮山僻土」の開発と富強の範を西洋諸国に求め、英人サトウ訪問を企図したが実現できなかった。後年「米沢海軍」と称するほど多数の海軍将官を輩出する背景の一つに、米沢藩の海への「こだわり」がその底流をなしていたとも考えられる。

甘糟は東北戦争の翌明治二年三月上旬、柔軟かつ鋭敏な思考で「東京遷都」や西洋学隆盛など、文明開化への趨勢を忽ち喝破した。そして元「朝敵の主謀人」の彼が、土佐藩の後援を得て、同年七月待詔下院出仕を拝命、勇躍して「禁中詰の朝臣」となった。奇しくも待詔上院には木戸・大久保・板垣らが既に出仕していた。しかし木戸は箱根に静養しその帰京は九月下旬であり、一方甘糟は九月母の看病で米沢に帰り、自身も罹病し職務に復帰できずに十一月、三十八歳で病歿した。この二人が実際対面し討論した形跡はない。だが、この両者の間に本質的な違いがあったろうか、さらに問い直してみる必要があるだろう。

(田中正弘)